
キョンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない

saamon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない

【Nコード】

N0972V

【作者名】

s a a m o n

【あらすじ】

キヨンがある日目を覚ますと、記憶を失っていた。

それだけならまだよかった。でも、それだけじゃ終わらない。

さまざまな問題にぶつかりつつも、キヨンは元にもどるため進み続ける！みたいな話です^^

#01 キヨンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない（前書き）

初めて書いてみたハルヒのパロ小説です。

おかしな点などありましたら、教えていただければありがたいです。
挿絵は入れられれば入れていくつもり。あんまうまくないけどへへ；

#01 キョンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない

暗い。

何も見えない。

ここはどこだ。

なぜ俺はこんなところにいる。

「ついた……」

ひどく頭が痛い。

しかし、なぜかすっきりともしている。

痛いとすっきりは共存するものではないはず。

しかし現に俺は今それを身を持って体感している。
言葉では表現しにくい感覚。

こんな感覚は………はじめて——？

初めて？

本当にそうなのか？

くっ！！頭が痛い！！

分からない!! 意味が分からない!! それが無性にいらつきを突き上げる。

「くそっ!! なんなんだよ、これ!!!!」

一体どのくらいの時間こうしていただろうか。

何も見えない真っ暗な闇の中を、ただふわふわと漂っている。
ブラックホールの中がこんな感じなのかもしれない。

なんだか意識が朦朧としてきた。俺はそれに反響するかのように視界を閉ざす。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

何か、聞こえる。

『・・・・・・・・・・め・・・・・・・・』

女の子の声？

『・・・・・・・・め・・・・・・・・ん』

悲しみを含んだやさしい女の子の声。

『・・・・・・・・ごめん』

ガアンッ！！

「・・・・・・・・痛い」

眠い目をこすりながら、今この惨事の状況を確認する。

どうやら俺はシングルベットからずり落ち、盛大に頭突きを床に繰り出したようだ。

俺はおそらくぶつけたと思われる、痛む後頭部をさする。こんなに俺は寝相が悪かったのか。

あれ、というか俺は――

カチャ

「早く起きて！」

部屋のドアが開かれ、同時に威勢のいい声が鼓膜まで響く。

「・・・・・・・・」

今俺はベッドの上で、毛布を体に巻きつけ横になっている。

なぜかと問われれば、いきなりの少女の大声に恥ずかしながら驚き、思わず布団に隠れてしまったとしか言いようがない。

我ながら自分のびりぶりにため息が出そうだ。

「ほら、早く起きて!!」

「・・・・・・・・」

ま、いいか。

ここで起きるのもめんどうだ。

俺はわめき散らす声を横耳に聞き、構わず狸寝入りを実行する。

あれだ。今日は春眠暁がどうのってやつだ。

だから俺は小鳥のさえずりを聞きつつ、静かな午前を――

ガアン!!

「早く起きてきてね。シャミ行こう」

俺を包んでいた聖なる布団オスさんは、いつのまにか布団の上に飛び乗っていたシャミセンこと三毛猫ごとひっぺはがされ、本日二度目と

なる頭突きをこれまた床に誘発させられた。

こうして、おれのHPと脳細胞を1／5ほど削り——いや、1／10にしておこう。

まあ、とりあえずこんな無駄なことを考えられるくらいのはできるほどのダメージを与え、シャミセンを抱きかかえて去っていった。

仕方ないので俺は、さっきの攻撃で弱りきっている睡魔のやろうを脳の隅に追いやり、ゆったりのっそりと支度を始める。

さてと——

俺は、何を支度すればいいのだろうか？

「・・・・・・・・」

ここで言うべきことはこれしかないだろう。

「ここはどこ？ 私是谁？」

どうやら俺は記憶喪失になってしまったようだ。

あれ、なぜ俺はシャミセンのことは覚えてるのだろうか？

ん？記憶喪失のわりに落ち着いてるなってか？

その点については自分でもびっくりだ。

頭の中では落ち着いていられる状況ではないことは把握していても、脳波・心音ともに朝の涼しげな風薫る林のようだ。

朝ということで脳が活性化していないのか、もしくは俺の精神力が常人をはるかに超えるくらい強いだろう。

後者だとしたら、俺もなかなかのものだ。そのレベルは、親が急病で倒れても残った仕事をしっかり片付け、

「お前もういいから病院行け！！」

といままで気をつかっていた上司がただ単にマジでうざがっている上司に変貌するほどの高さであろう。

とりあえず部屋を見渡し、役に立ちそうな情報の入手を試みる。

それにしても普通の部屋だな。飛びぬけて色彩をふんだんに使った、派手な部屋でもなければ、アラブの砂漠のように殺風景なわけでもない。

普通にくらしたらこんなもんだろうなっていうくらい普通中の普通だ。

しいて上げれば、ぬいぐるみが多いのが気になるな。

記憶有りの俺は、以外に可愛い趣味をもっていたようだ。

ま、否定するきはないが。

見渡してみても分かったことは二つ。

一つは見渡すほどでもなかったが、衣類から察すると、今が冬であ

るということだ。

しかもこの肌に刺さる鋭い寒気から予想すると、おそらく十二月の後半ほどだろう。

そしてもう一つは、俺が学生であること。それも、おそらく高校生だ。

机の上に置いてある学校指定であろうカバンがそれを物語っている。

これだけあれば十分だ。

とにかく俺は学生の性分である、学生服に着替える作業に移る。

しかし、学生服が見当たらない。

とすると————クローゼットか。

俺は定価いくらかは知らんが、その辺の家具屋に行けば、バーゲンで売られていそうな安っぽいクローゼットに向かい、手を掛ける。

下の車輪が高い悲鳴を上げるのを聞きながら、横にスライドさせると、予想道理学生服が————

「……っ! ! ……なに、これ! ?」

そこには確かに学生服が掛けられていた。しかし……………これはどう見ても————

「女子用……………よね?」

な、なにこれー！ー！ー！？

私は両手で頭を抱え、どっかの金髪アメリカンもびっくりのガツテム！！なんてオーバーリアクションを繰り出すしかなかった。

そんなことを心の中で叫びつつ、私は自分の言動に疑問を感じながら鏡を求めて部屋を飛び出した。

もしかしたら、クローゼットのドアの内側にも鏡くらいいついていたかもしれないけど、その時の私にはそんなことを考え付く余裕なんてなかった。

私は、そんなにも高くもない段差を踏み外しそうになりながらも、なんとか踏ん張りそのままの勢いで洗面所に飛び込む。

正面の鏡に映るのは、茶色の長髪で、目は思いのほかぱっちりしている女の子。

自分で言うのもなんだけど、なかなか綺麗な顔立ちをしていた。

> i 2 7 7 6 5 — 3 6 0 2 <

膝が震える。

記憶喪失だと気づいてもずっと平常心をたもっていた心臓が心音を乱し、つられて血がたぎっていくのが分かる。

足が崩れ、倒れ込む体をとっさに掴んだ洗面台で支える。

今にも頭が狂ってしまいそうだ。

体を支える手が明細に激しく痛む。

私は、女になっていた。

#01 キヨンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない（後書き）

評価いただければうれしいです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0972v/>

キヨンの記憶喪失とそれだけじゃ終わらない

2011年7月25日17時41分発行